

MUSASHINO PARK-LIFE MAGAZINE

MPM
2026
VOL.
22

むさしのパークライフマガジン

YOUR PARK LIFE: Park Life × ふ〜ど
FOCUS: 育てる人、つくる人、
食べる人が集う「麦の収穫祭」

公園からはじまる、気持ちのいい一日。

季節を感じ、ほっとできる場所。

なにもしない、贅沢な時間。

……きっと、公園で過ごす時間は暮らしを豊かにする。

私たちは、そんなことを思っ日々公園で働いています。

公園を使いこなすと、どんなライフスタイルが待っているのか。

この「MUSASHINO PARK-LIFE MAGAZINE」では、

ちょっと素敵な自然のこと、

いままで気づかなかった生きものの不思議、

暮らしを豊かにする公園の使いこなし方、などなど。

公園で働く私たちだからこそお届けできる、

“パークライフ (Park Life)”の魅力をお伝えしていきます。



Park Life × ふ〜ど

「ふ〜ど」は
公園が地域に広がる合言葉！

風土は、水・土・風、そして人のいとなみによってつくられます。

その風土から生まれる食＝food。

さらにそれらの中で暮らす地元の人々のつながりをさす hood(ネイバーフッド)。

この三つを重ね合わせた言葉が、私たちが考える「ふ〜ど」です。

武蔵野の公園では、

この“ふ〜ど”を生かしたたくさんの活動があるのです。

六仙公園は、
武蔵野の公園パートナーズが考える「ふ〜ど」を代表する公園。

水はけの良い武蔵野台地と
そこから湧く南沢緑地保全地域の湧水と落合川の水辺。
こうした乾いた土地と湧き水という
コントラストの強い“風土”から育まれたのが、
柳久保小麦をはじめとする農産物です。
その農産物を使ったパンなどのおいしいものたちが“food”。
「麦の収穫祭」や「防災キャラバン」などは
そうした地域の力が結集された“hood”です。

私たちは、こうした地域の「ふ〜ど」を意識のまんなかに置いて、
公園の環境と人々の暮らしがゆるやかにつながり、
固有のカルチャーや歴史が紡がれていくことを目指しています。

水・土・風、

そして人々のいとなみによって

つくられるもの。



風土

六仙公園周辺の風土を形づくっているものの一つが、今も地域に息づく「農」の風景です。

水はけのよい武蔵野台地では、開墾以来、畑作が盛んに行われ、野菜や果樹など多様な農産物がつくられてきました。

奈良山園の野崎林太郎さんは、「昔から育てられてきた作物は、その土地に合っている」と考えます。なかでも小麦は広く栽培され、柳久保小麦のような、この土地で栽培されてきた特産の品種もあります。野崎さんの畑では地域の子どもたちが、在来小麦の種まきから収穫までを体験しています。

また、約10年前から家業の書店で野菜の販売を始め、現在は約15軒の農家と連携。駅前で夜まで開く書店が、地域の農産物を幅広い世代へ届けています。受け継がれてきた農と、今を暮らす人々のいとなみ。その重なりが、東久留米ならではの風土を育てています。



野崎書林マルシェ

教師だった祖父が開業した野崎書林。併設のマルシェでは、近隣農家の生産物や、奈良山園の果物を使った「東京ジャム」、柳久保小麦のパンケーキミックスなど、地域の加工品を販売している。



奈良山園の野崎林太郎さん

日本と緯度の近い地域で長く育まれたズッキーニなどのイタリア野菜は、この土地の風土にもなじむそう。ほかに多品種の野菜やブルーベリーなどの果樹、平飼卵も生産している。



柳久保小麦

江戸時代末期から東久留米の柳窪で栽培されてきた在来小麦。草丈が高く、長く丈夫な麦わらは、かつて茅葺き屋根の材料としても使われた。一度は栽培が途絶えたが、昭和末期に地域の農家の尽力によって復活した。

柳久保小麦畑の風景（奥住さんの畑）

「風土」から生まれた

新鮮な地元野菜は、
心を豊かにするごちそうに！

"food"で心もカラダもつくられる！

王様のご馳走プレート（フェリーチェ）

近隣農家やタネニハファームの季節野菜をふんだんに使ったランチプレート。肉や魚の主菜に、サラダや蒸し野菜、ラベなどが彩りよく並ぶ。庭の景色や畑の眺めも気持ちいい「タネニハの森」にあるレストラン。



ブチ・フル・宮沢ロミさん
「麦の収穫祭」発起人の一人



ナッツ棒とクロワッサン（ブチ・フル）

柳久保小麦を100%使用。ナッツ棒は、天然酵母と全粒粉を使い、噛むほどに小麦の風味が広がる。六仙公園近くの店では、地域の味を家庭で楽しめる各種ミックス粉も開発し、販売している。



タネニハの森・谷口竜太さん
「タネニハの森」全体の窓口



柳久保小麦の肉汁うどん（caféてん）

手打ちならではのコシと、柳久保小麦の芳醇な風味が楽しめる一杯。国産豚バラのつけ汁も丁寧に仕込む。東久留米市役所内で「活動センターかなえ」が週3日、1日5食限定で提供。



それぞれのお店情報はコチラから

ふ〜ど
2

Food

地域の風土から生まれた農産物は、地元の作り手の工夫によって、さらに豊かな“food”へと姿を変えていきます。

「タネニハの森」は、農家の屋敷と敷地を生かし、農業やレストラン、花の生産などをつなぐ場所。レストランでは、敷地内や近隣で採れた農産物を、特別な皿に仕立てています。「ブチ・フル」は、柳久保小麦をパンやミックス粉に生かし、その魅力を家庭やまちへと広げてきました。「caféてん」では、障がいのある人がいきいきと働く場としていとなみ、地産地消の食材を用いた手打ちのうどんを提供しつづけています。

育てる人、作る人、味わう人。地域をめぐるこの循環が、人と人をおいしい笑顔で結び、東久留米の健やかな暮らしを支えています。

ご近所に助け合える人が

いるということ

ふ〜と
3

hood — ネイバーフッド・地元 —

地域に住む人たちが出会い、ゆるやかにつながり、困ったときに助け合える関係を育てること。それが“hood（ネイバーフッド・地元）”です。公園では、そうしたつながりがあちこちで生まれています。

ネイバーフッドデザインやひととわ不動産の仕事に取り組み、東久留米市に暮らす荒昌史さんは、公園について「さまざまな世代や価値観をもつ人が自由に過ごせる、ゆるやかさの象徴であってほしい」と語ります。遊ぶ人、休む人、活動する人。誰もが思い思いに過ごせるからこそ、日常の中に小さなつながりが育ちます。

六仙公園では、市民のアイデアをパークコーディネーターが受け止めて、さまざまなイベントや活動を、地域のみなさんとともに実現しています。その一つである「麦の収穫祭」の大ファンでもある荒さんは、こうした場が、ご近所に仲のよい人や、いざというときに頼れる人をつくるきっかけになると話します。公園は、地元＝hoodを育てる拠点なのです。

ネイバーフッド（neighborhood）：同じ地域で暮らし、働き、活動する人々と、そのつながりのこと。農や食、公園をきっかけに生まれる交流も、地域のネイバーフッドを育てている。

麦の収穫祭

六仙公園で開かれる「麦の収穫祭」。地元の人の発案から始まり、今では約5000人が集まる催しに育った。大勢が集まっても穏やかな空気が流れるのは、地域にゆるやかなつながりが根づいているからかもしれない。



防災キャラバン

地域の防災について、行政・市民・事業者のみんなで考え、体験するイベント。地元事業者によるテントサウナやストロボの実演など、地域にある技術や知恵が生かされている。

ガーデンボランティアの活動

六仙公園ボランティアや「ちょいボラ DAY」など、花壇の花やみどりを市民の手で育てることで、日常のつながりが育まれる。



荒昌史さん

HITOTOWA INC. 代表取締役。ネイバーフッドデザインの専門家として、東久留米やひばりが丘地域の関係性づくりに取り組み、現在はひととわ不動産として「学園町」や「タネニハの森」に携わり、自由学園でも講師を務める。著書に『ネイバーフッドデザイン まちを楽しむ助け合う「暮らしのコミュニティ」のつくりかた』（英治出版）がある。

パークコーディネーター

公園をもっと楽しく、使いやすくするために、地域のみなさんと一緒に考えたり、活動がうまく進むように支えたり・つなげたりする、公園の専門スタッフ。



荒昌史さんと

お話を聞いた六仙公園パークコーディネーターの福谷実和

育てる人、つくる人、食べる人が集う

麦の収穫祭

六仙公園で繰り広げられるのは、人々を結ぶお祭り。

2026年で第10回を迎える「麦の収穫祭」。カフェやマルシェ、ワークショップなど、イベントを支える実行委員の皆さんに、その始まりや魅力について伺いました。

「東久留米に住んでいる人は、小麦が地元の名産であることを知らないのではないかな」

そんな問いから始まったのが「麦の収穫祭」です。東久留米産小麦を使ったパンづくりで長年取り組んできたブチ・フル店主の宮沢ロミさんと、柳久保小麦の復元に尽力してきた農家の高橋重雄さんを中心に、「畑を耕し育てる人、つくる人、食べる人」が集い、地域のみんなでつくる祭りとして歩み始めました。

第1回は2014年、東久留米市役所の市民プラザで、地元産小麦を使ったパンや焼き菓子の販売から始まりました。2016年に会場を都立六仙公園へ移してからは、飲食やマルシェ、アート、ステージ、ワークショップへと広がり、2025年には90を超える出店、約5000人を超える来場者でにぎわいました。



当日は、お気に入りのパンや焼き菓子を手に、芝生にレジャーシートを広げて過ごす人の姿があちこちに見られます。小さな子ども連れの家族から高齢者まで、思い思いの時間を楽しめる、牧歌的で開放感のある雰囲気が、この祭りの魅力です。

左から、MARIKOさん（まめフォト）、yucoさん（ユメノキ）、垣原萌さん（実行委員会チラシ装飾担当）、福谷実和（都立六仙公園パークコーディネーター）、宮沢ロミさん（ブチ・フル）、赤田晴香（都立武蔵野公園パークコーディネーター）、中村弥奈子さん（実行委員事務局）、恩塚理恵さん（焼き菓子屋 otto）

得意なことを持ち寄って一緒に楽しむ！



麦の収穫祭のマスコット「麦太郎」

「麦の収穫祭がきっかけで会えてよかった、という声を毎年いただきます。ここでしか会えないお客さんもいて、活動を知ってもらう機会にもなっています」と、雑貨販売やワークショップで参加する yuco. さん。店舗を持たず、イベントを中心に焼き菓子を届ける恩塚さんも、「ここでしか会えないお客さんに会えたり、覚えてもらえたりすることが、とても嬉しい」と話します。出店者にとっても、公園の風や音を感じながら、のびのびと交流できる大切な一日です。

会場には、小麦について楽しく学べる展示や、麦わらを使うフィンランドの伝統装飾「ヒンメリ」のワークショップなど、祭りの原点を伝える工夫も用意されています。

祭りを支えているのは、日頃から地域で活動する人たちです。実行委員事務局の中村さんは、「普段の活動の中で、一緒に楽しんでもらえそうな人を巻き込んでいます」と語ります。飲食店、農家、アート作家、地域団体など、多様な人が得意なことを持ち寄ることで、ここには新しい出会いとつながりが生まれます。

東久留米の風土が育んだ小麦を味わい、人と人とのつながりを楽しむ。「麦の収穫祭」には、土地の個性を表す「風土」、地域の恵みを味わう「food」、そして、近所同士がつながる「hood」という、武蔵野の公園が大切にしている三つの「ふ〜ど」が重なっています。市民がつくり、市民が育ててきたこの祭りは、麦を起点に、地域の魅力と人の輪をゆるやかに広げています。

NEWS

第10回 麦のちいさな収穫祭

〔開催日時〕2026年10月3日(土) 10:30～15:00
〈雨天順延：10月4日(日)〉

〔場所〕都立六仙公園

〔主催〕麦の収穫祭実行委員会

〔後援〕東久留米市

〔お問合せ〕六仙公園サービスセンター TEL 042-475-1034 (8:30～17:30)





六仙公園に こむぎひろばが登場！

令和7年11月、六仙公園に「こむぎひろば」が誕生しました。
東久留米の伝統作物・柳久保小麦をモチーフに、クロワッサンや
食パンのすべり台、ピザ窯をかたどった砂場、パンケーキの遊具など
が並びます。ユーモアたっぷりの遊具に誘われ、広場では早くも子どもたちが走ったり、登ったり、砂遊びを
したり。それぞれお気に入りの場所を見つけ、思い思いに楽しい時間を過ごしています。



六仙公園 20th 記念スタンプ台紙配布中

都立六仙公園

開園20周年アニバーサリープロジェクト

都立六仙公園は平成18年、廃校となった小学校の跡地に
開園し、令和8年に20周年を迎えました。

これを記念して、六仙公園をイメージしたすてきなイラスト
のスタンプと台紙をご用意。新しくできたサービスセンター
にぜひ立ち寄り、思い出と一緒に持ち帰りください。

※用意した台紙がなくなるまでとなります

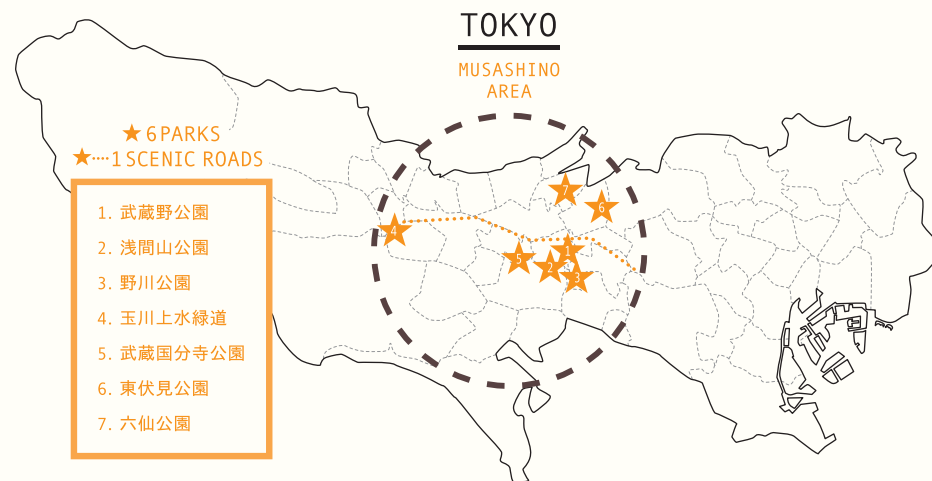


むさしのの都立公園

国分寺崖線や玉川上水など、水とみどり豊かな「武蔵野エリア」にある7つの都立公園です。
指定管理者「武蔵野の公園パートナーズ」は「人・自然・まちが元気になる公園に」をコンセプトに、
武蔵野の自然と文化を大切にしながら、みなさんとともに、元気になる公園づくりをすすめています。

武蔵野の公園パートナーズ構成団体：

西武造園(株)・NPO法人NPO birth・ミズノスポーツサービス(株)・(一社)防災教育普及協会



発行：武蔵野の公園パートナーズ TEL:0422-31-6457(都立野川公園) <http://musashinoparks.com>

発行日：2026年9月4日

写真：武蔵野の公園パートナーズ / NPO法人NPO birth / 井上 茂 P4～9、p11 下段、P12 下段、P14 上段・中段

デザイン：川上 明子

文：阿部真弥 / 鈴木佳子(はけの道編集室)

編集・製作：武蔵野の公園パートナーズ / はけの道編集室(合同会社ニーヨリー)

印刷・製本：シナノ書籍印刷株式会社

表紙写真 / 「オギ」都立武蔵野公園(撮影：最首希咲)

MUSASHINO PARK-LIFE MAGAZINEのバックナンバーは、むさしのの都立公園のHPで見ることができます。
<http://musashinoparks.com/magazine/>



MUSASHINO PARK-LIFE MAGAZINE

MUSASHINO PARKS PARTNERS

<http://musashinoparks.com>